

丸山眞男が格闘したものの

非政治的もしくは超政治的存在としての天皇という視角から

講師プロフィール



加藤陽子 氏

東京大学大学院人文社会系研究科歴史文化学
科教授。博士(文学)。専門は日本近現代史。主
著に『模索する一九三〇年代:日米関係と陸軍中
堅層』(山川出版社、1993年、2012年新版)、『天
皇と軍隊の近代史』(勁草書房、2019年)、『昭和
天皇と戦争の世紀』(講談社学術文庫、2018年)、
『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』(新潮文庫、
2016年)など。

日時 2023年12月16日(土) 15:00~17:00

場所 東京女子大学 23号館 23101教室

※新型コロナウイルスの感染状況により、対面形式での開催を中止する場合がありますのでご了承ください。

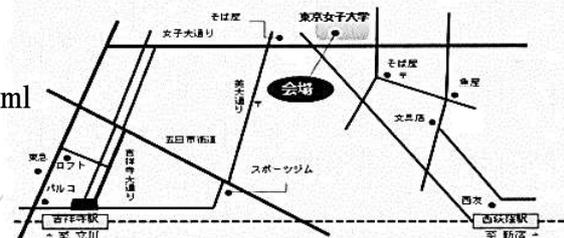
事前申込制 (対面・遠隔同時開催)

東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センター

〒167-8585東京都杉並区善福寺2-6-1
TEL:03-5382-6817 MAIL:maruyamabunko@gr.twcu.ac.jp
HP:<https://www.twcu.ac.jp/main/research/maruyama-center/index.html>
*事務取扱時間:水・木・金曜日(10:30~16:30)

○アクセス

- JR西荻窪駅北口より徒歩約12分
- 西荻窪駅北口または吉祥寺駅行きバス吉祥寺駅北口より西荻窪駅行バス「東京女子大前」下車



講師メッセージ

およそ日本の知識人と位置づけられる人間で、日本の近代と格闘しなかった人間を思いつくのは難しいだろう。たとえば夏目漱石は、日露戦争後しばらくたった1911年、こう慨嘆している。「歴史は過去を振り返った時始めて生まれるものである。悲しいかな今の吾等は刻々に押し流されて、瞬時も〔中略〕吾等が歩いて来た道を顧みる暇を有たない。吾等の過去は存在せざる過去の如くに、未来の為に蹂躪せられつゝある。吾等は歴史を有せざる成り上りものゝ如くに、たゞ前へ前へと押されて行く」。過去を振り返る時間を持たずにきたこの国の民には「歴史」がない。もちろん、語るべき「歴史」は本来たくさんあるはずなのだが。

日本が歩いて来た道を顧みる、最もよい機会の一つであったはずの第二次世界大戦の敗戦後の世界においても、この国は、どさくさの中で過去を十全に顧みず、先を急いでしまったのではないか。まさに、「未来の為に」過去を蹂躪したが、そのプロセス自体が忘却されて久しいと思われる。たとえば、「皇室典範」という、名称だけを継承した、法律としての皇室法は、日本国憲法第2条が定めているように、「国会の議決した皇室典範」であるはずだった。だが、この皇室法は、日本国憲法の施行、国会の開会を待たずに、1946年12月6日の第91帝国議会の場で、議員自身が、「われわれは国会ではない」、「今日の議会」と「将来の国会」の権限上の差異は重大である、正式の国会の設置をみる前に審議すべきではない、との深い洞察と危惧を述べていたにもかかわらず、決定が急がれた経緯など、今やどれだけの人が知っているだろうか。

本講演では、丸山眞男「戦争責任論の盲点」『思想』(1956年3月号)を話の入り口として、天皇「それ自体何か非政治的もしくは超政治的存在のごとくに表象されてきたこと」が、日本の近代の歩みといかなる内在的な関係を持ってきたのかを考えたい。

お申し込み方法

・参加を希望される方は、当センターまで葉書(氏名、性別、住所、電話番号を明記)もしくは下記 QRコード、URLよりGoogleフォームでお申し込みください(締切:12月10日必着)。



お申込みURL

<https://forms.gle/tYwm3cUyEQvDbSPd8>

ご参加に際してのご注意

- ・対面参加の方は正門よりキャンパスに入構してください。入構後は会場までの範囲以外に立ち入らないようにしてください。
- ・定員(対面300名・遠隔250名)を超えた場合、締切日前に受付を終了させていただきます。また、当日の混雑状況により別室での参加をお願いする場合がございます。あらかじめご了承ください。